



ロレム・ Ipsum
   
 第1号

ロレム×人 映画プロデューサー・小川孝雄さん
   
 ロレム×場 公共空間とカフェ・奈義町現代美術館
   
 ロレム×食 節子さんのヒトサラ
   
 世界のカフェから スペイン・バルセロナ「バルの朝ごはん」

TAKE FREE

ロレム×人

「今、映画って面白い」
   
 映画プロデューサー・小川孝雄さん

「映画ってどんなものですか」と問われたとき、
   
 私たちは、それぞれ、どんな答えに辿り着くだろう。
   
 その多くは映画を「映画館で観る」対象として
   
 捉えていることからくるものではないだろうか。
   
 「今、映画って面白い」と話してくれたのは、
   
 昨年第42回岡山市文化奨励賞(芸術部門)を受賞した
   
 映画プロデューサーの小川孝雄(おがわ・たかお)さん。
   
 約40年、映画と共に生きてきた小川さんの
   
 これまで、今、これからをインタビューした。
   
 (2016年3月9日、聞き手：杉本克敬)

改めて受賞おめでとうございます。
   
 小川さんにとってどのような賞でしょうか――

美術であれば画家、文学であれば作家、映画であれば監督や役者といったプレーヤーが注目されがちです。しかし、今回はプロデューサー、どちらかというど裏方のポジションに光が当たりました。私の仲間は映画を支える立場の方々が多いので、共に喜びを分かち合うことができました。受賞は私個人の評価だとは思っていません。むしろプロデューサーを続けてこられた周囲への感謝の気持ちが強いです。「映画」というジャンルでは初選出なので、映画に携わる全ての人を勇気づけることができれば嬉しいです。

ゼロからの出発、戸惑いながらも映画と生きる

新藤 兼人(しんどう・かねと)
   
 広島県出身の日本の映画監督、脚本家。
   
 日本のインディペンデント映画の先駆者。
   
 「原爆の子」「裸の島」など
   
 社会性の強い映画作品を多く発表した。
   
 2011年「一枚のハガキ」が最後の作品。
   
 翌年、満100歳で逝去。

原 一男(はら・かずお)
   
 山口県出身の日本の映画監督。
   
 「さようならCP」「ゆきゆきて、神軍」
   
 「全身小説家」など
   
 ドキュメンタリー映画を数多く手掛ける。

河瀬 直美(かわせ・なおみ)
   
 奈良県出身の日本の映画監督。
   
 代表作は「萌の朱雀(もえのすざく)」
   
 (1997年製作、第50回カンヌ国際
   
 映画祭カメラ・ドール(新人監督賞)
   
 史上最年少(27歳)受賞)や、
   
 「殞の森(もがりのもり)」
   
 (2007年製作、第60回カンヌ国際
   
 映画祭グランプリ賞)など。

仲村 颯悟(なかむら・りゅうご)
   
 沖縄県出身の日本の映画監督。
   
 2010年「やぎの散歩」で
   
 当時中学生監督として脚光を浴びる。
   
 2014年、基地と海に囲まれた沖縄の
   
 若者たちの揺れ動く心の葛藤を描いた
   
 「人魚に会える日。」を製作。2016年より
   
 順次全国で公開予定。

今年の第9回岡山映画祭はどのような内容でしょうか――

10月29日から11月6日の期間中、地元岡山発作品や見る機会の少ない映画約15本を市内3カ所で上映する予定です。新しい取り組みとしては、「多様な映画制作のかたち」を考えています。従来のようにプロダクションが制作したものでなく「映画祭」、「映画館」、「民放局」、「障がい者の方と支援者の方」など様々な新しい主体が作った映像やドキュメンタリーの上映を予定しています。
   
 またもう一つの取り組みとして、若い世代へ映画の裾野を広げるために「集まれ! 中高生監督たち」を実施します。フィルムからデジタルに技法が広がり、スマートフォンのような身近な道具でも簡単に映像が撮れるようになりました。テーマやジャンル、撮影方法など、今ならではの表現が生まれています。中高生の自主作品を持ち寄った上映会のほか、「ゲスト監督との交流、現在大学生の仲村颯悟さんの新作「人魚に会える日。」の記念上映も準備中です。どんな映画が現れるのか、今から楽しみです。

映画の持つ
   
 多様性と可能性

小川さんにとってプロデューサーとは、
   
 また映画に寄せるこれからの想いとは――

上映の場に一人でも鑑賞者がいれば、映画は成り立ちます。逆に一人もいなければ、映画は完成しない。そういう意味では映画を最後に完成させるのはお客さんで、彼らもまた「産み出す人＝プロデューサー」です。あえて私が違う点を上げるとすれば、最初から最後まで、その作品に関わる時間が長いということだけです。
   
 ここ数年、制作現場の幅が広がっています。農業をしながら映画を撮ったり、クラウドファンディングで資金を募ったり、演技経験のない人でも役者になったり。手を取り合って映画を作り上映する、仲間と語り、そこからまた新しいものが生まれる。そんな風に「やろうと思えば映画が作れる街」に岡山も変わっていくのではないのでしょうか。

ゼロから出発して40年間携わってきましたが、映画は日常を表現するツールとして本当に身近になりました。映画が変える人生もあるでしょう。映画は「映画館で観る」だけのものではなく「誰もが関われる」時代。その多様性や可能性を強く感じられる今、私は映画って本当に面白いって言えると思っています。



小川 孝雄(おがわ・たかお)
   
 1953年岡山市生まれ、岡山大学法文学部経済学科卒業後、岡山労働金庫(現・中国労働金庫)に入行。会社員時代から映画のほか、地域コミュニティの問題解決にも多数関わる。2014年「シネマトリップ・映画『月の輪古墳』から始まる旅」を監督。現在、岡山映画祭実行委員長、岡山NPOセンター監事、美作大学非常勤講師など。

岡山映画祭
   
 公式HP <http://d-mc.ne.jp/off/>
  
 公式facebook [okayamafilmfes2012](#)

卒業後は映画とは違うお仕事に就かれました。

映画の活動はどのように続けていかれたのでしょうか――

学生時代にお世話になった原一男監督の疾走プロダクションに就職することも考えました。しかし、自主制作映画に多く出会い、それを応援する経験を重ねることで、仕事でなくても、地方にいても、映画と共に生きることではできると思えるようになりました。私は地元の金融機関に就職し、岡山に留まりました。この時は、くすぶってはいませんでしたよ(笑)
   
 卒業から半年経った1976年の秋、自主映画を上映するグループ「残像舎」を結成しました。3カ月に1度の鑑賞会を企画するほか、上映作品の監督インタビューや批評などを掲載したミニコミ誌「映画時代」も13号まで発行しました。
   
 同じような自主上映団体は全国にありましたが、活動を続ける中、自主上映の見方、見せ方がそれぞれ変化してきました。常に映画を見られる場を求めれば、単館上映を中心としたミニシアターを開設する。一度に多くの映画を集めようとすれば映画祭を企画する。そんな過渡期でした。私たちが残像舎の活動にピリオドを打ち、みんなで映画を応援するスタイルの市民映画祭を目指し、動き始めました。

1995年(平成7年)には新たな活動として、第1回岡山映画祭となる「岡山ドキュメンタリー映画祭」を開催されました――

上映の場を作ることから、時間や感動、体験を共有することを目指し活動の幅を広げたのが「岡山ドキュメンタリー映画祭」です。音楽や小説のように、映画ももっと自由に見て、自由に表現する。劇映画やドキュメンタリーといった枠に囚われず解放的になることで、映画の新しい楽しみ方を見つけられるのではと思っていました。
   
 映画館での上映だけでなく、「自由工場」のような市内の廃ビルを利用したアートスペースでも上映しました。24本の作品が街の中に飛び出して行くのを見て、もっと身近な場所で映されていいのだと、改めて思いました。
   
 この映画祭に「につつまれて」「かたつもり」を出品し、ゲスト登壇もしてくださった河瀬直美監督が「芸大生だけがピアニストになるのではない。ピアノをひく少女もピアニストと呼びたい」と私に語ってくれました。特別な人が映画を作り、私たちはそれをスクリーン越しに対峙する観客にとどまるのではない、映画は自分たちの手にあるということだったのではないのでしょうか。このことは今でもよく覚えています。

映画の世界に踏み込んだきっかけはどのようなものだったのですか――

岡山大学に進学しましたが、都会への憧れもあったので、やや気持ちはくすぶっていました。部活も文化放送部かなとぼんやり考えていたぐらいですが、友人に「映画研究部(映研)に入ろう」と誘いを受け入部しました。ところが、テレビの普及などで、映画業界は斜陽。映画会社も助監督の採用を中止しなければならない程でした。また、学生運動が盛んだった先輩達の頃は「石かカメラのどちらを持つべきなのか」といった社会のテーマもありましたが、それもほぼ終わっていました。私たちはゼロからの出発、戸惑いや模索を繰り返しながら何もかも新しく作り上げていかなければならない――、そんな時期に、映画と出会いました。

予期せぬ入部に当時の社会状況の中
   
 映画研究部ではどんな活動をされていたか――

先輩の紹介で、かつて表町にあったSY松竹文化(2005年9月閉館)という映画館でアルバイトを始めました。映写以外は何でもやりました、ポスター貼りやチケットもぎり、コーラの空き瓶回収まで。夜間警備の宿直もあり、週に3日は泊まっていました。朝、映画館から大学へ、夕方にはまた映画館。これだけ映画に囲まれていると、自分で映画を招き自主上映がしたいという気持ちが、自然に強くなってきました。
   
 初めての自主上映は、新藤兼人監督の「裸の十九才」です。1968年から69年にかけて起こった、連続射殺事件の犯人である永山則夫をモデルとした作品です。監督自身の独立プロダクションで制作された映画です。「私は生きる、せめて二十歳のその日まで」と書かれたシナリオを読んで、どうしても自主上映したいと思いました。私もちょうど19歳でした。16ミリ映写機の使い方を教えてもらい、大学内の学生会館を借りて上映しました。この映画が一番記憶に残っているという映研の後輩もいるぐらい、仲間と共に多くの経験と実感を得た貴重な時間でした。
   
 在学中に1本、監督として8ミリ映画も撮りましたが、岡山シネクラブのような自主映画グループの応援など、自主上映と映画鑑賞にあけくれた日々でした。



ロレム×場

公共空間とカフェ  
 奈義町現代美術館／Nagi MOCA

満開の桜並木を横目に、岡山市内から県道を北に向かう。目的地は、県内最北の公設美術館「奈義町現代美術館(Nagi MOCA)」。

遠くからでもすぐにそれと認識させてくれる円柱状の建物が目印。玄関をくぐり受付から右に進むと、館内にはカフェがある。店名は特

にない。館長の岸本和明さんが、そこで出迎えてくださった。

20人は相席できる大きなテーブルに、4人掛けの机が2つとカウンター。カフェの利用

ただと入館料はいらない。奥側は自然光を取り込める大きなガラス張りで、それを隔てた向こうは美術館。カフェからは3つ全ての展示室と借景の那岐山が見える。普段は風

にそよぐ水面が美しいのだが、この日は清掃のためか、池に水が張られていない。

メニューはオープンから変わらない。エスプレッソと紅茶が300円、ジュースが200円。やや苦味の強いエスプレッソは、チューリップフォルムのデミタスカップで提供される。

アールの少ないマットなスプーンと、ラ・ペルーシュのころっとしたきび砂糖、小ぶりのグラスに入ったお水が添えられている。ナポリの提供スタイルによく似ている。

カフェ専門のスタッフはいない。接客、会計、片付け、その時に手が空いている人が動く。館長も、もちろん例外ではない。

自主運営のカフェが併設されている美術館は全国的にも珍しい。発案したのは同館の設計者、磯崎新氏。1994年(平成6年)のオープン当時、モダンアートもカフェも、まだ生活からやや遠いところにあるものだった。来館者数は伸び悩み、地域への浸透も感じられず、ビジョンを見失いそうになる中、「10年先行く美術館です」という磯崎氏の言葉を頼りに模索を続けた。

開館10年を過ぎた頃、文芸誌「美術手帖」で地中美術館(香川県直島町)や21世紀美術館(石川県金沢市)などの特集が組まれるなど、モダンアートへの関心が強まる。時代の追い風を受け、同館の認知度も一気に高まり、13年目の2006年(平成18年)、来館者数が前年を上回る。

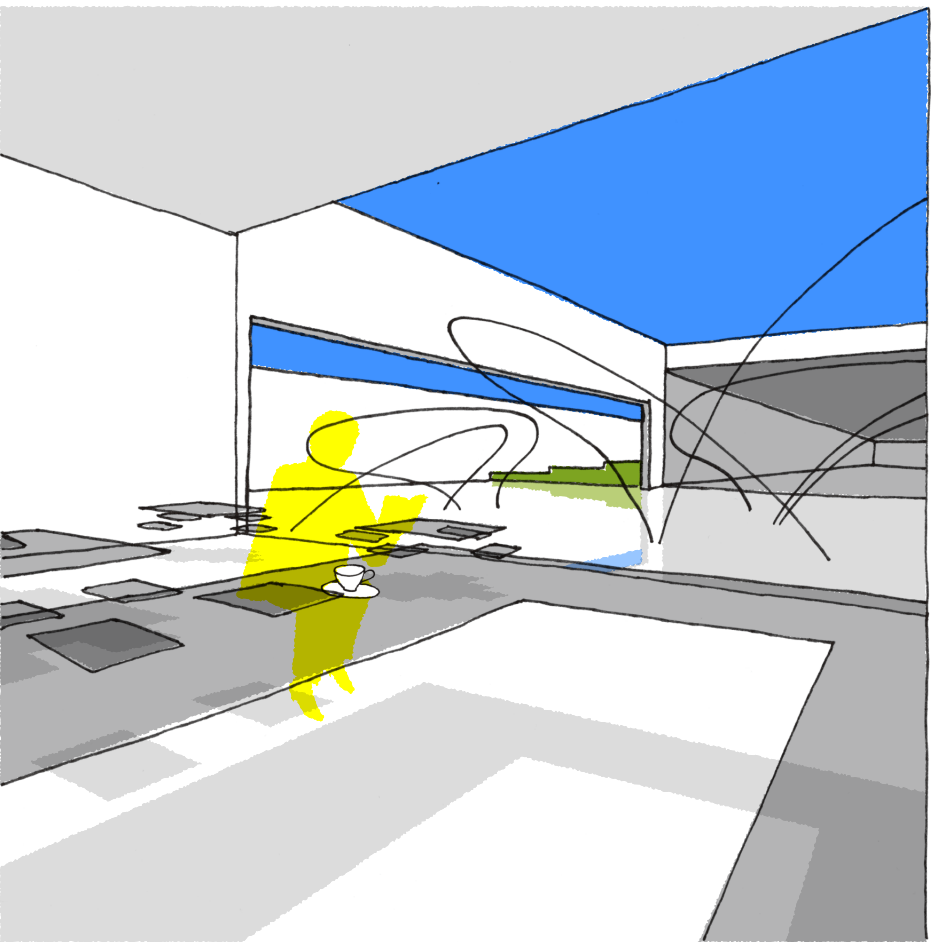


Illustration: Ono Keiji

この日は50代ぐらいの男性が一人、本を片手に、二杯目のエスプレッソを飲んでいた。美術館には足を運んだ様子はない。

お客様の中にはカフェを目的に山陰地方から定期的に来られる方もいるそう。アーティストトークなど、作家と来館者を結ぶイベントが定期的に行われているが、大きな企画展がない時は、比較的落ち着いている。

公費で維持する以上、一定の成果も求められる。カフェ単独で継続的に利益を確保していくことは容易ではないが、場の雰囲気やコンセプトを保てる自主運営のメリットもある。

常設展と企画展、スタッフと来館者、美術館と地域、都市と地方。美術館を取り巻く複雑な要素を、カフェはそのすきまに静かに、緩やかに取り込んでいる。

「アートは人間文化そのもの。そんなに遠い所にはありませんよ」という館長の穏やかな言葉は、館の変わらぬ姿とともに、このすきまのカフェがこれからもあり続けるだろうという安心感をどこかもたらす。☺

奈義町現代美術館／Nagi MOCA  
 〒708-1323  
 岡山県勝田郡奈義町豊沢441  
 開館時間：9:30-17:00(最終入館16:30)  
 休 館 日：毎週月曜日(祝日の場合は開館)および祝日の翌日  
 入 館 料：一般大学生700円(500円) 高校生500円(350円) 小中学生300円(200円)  
 ※ ( )内は団体割引(20人以上) 障がい者、75才以上は無料  
 問 合：0868-36-5811  
 館 長：岸本 和明(さしもと・かずあき)

開 館 日：平成6年4月25日  
 設 計 者：磯崎 新(いそざき・あらた)  
 芸術家と建築家の共同制作という先駆的な手法で、作品と建物を半永久的に一体化させた現代美術館。「太陽」「月」「大地」の巨大な3つの展示室それぞれに作品が結合し、季節や時間、気候など、その時々の変化と共に自分の感覚で世界を捉えることができる空間になっている。



世界のカフェから

#01, スペイン・バルセロナ  
 「バルの朝ごはん」

レポート：大井 麻有実



温かいカフェ・コン・レーチェが飲みたい時には

¡Leche, muy caliente!

(レーチェ、ムイ・カリエンテ)



十数年前に初めて訪れた街、スペイン・バルセロナ。滞在先のアパート周辺の環境が良かったおかげか、とても充実した日々を過ごすことができ、あれから何度か足を運びました。いつも個人旅行のため、一日中好きなことが出来る。その中で、決めていたことの一つが「朝ごはんはバルで食べること」でした。

観光エリアのランブラス通りやゴシック地区から、少し離れたエリアに滞在していましたが、この周辺だけでもバルは……6カ所も！しかもどこも徒歩3分内に！ここはバル密集地帯!? という訳ではなく、至って普通の光景です。歩けばすぐにバルが見つかる、バルセロナはそんな街です。



その中で私が足しげく通ったのは、オヤジが2、3名(1人が接客、あとは厨房にいる)で切り盛りしているお店。私の定番は、トマトをすりつけオリーブオイルをかけた固いパゲットにタマネギやジャガイモの入った熱々のオムレツを挟んだ「ボカディージョ」(サンドイッチ)と、「カフェ・コン・レーチェ」(カフェ・ラテ)。どちらも、たまらなく美味しい。

店内のお客は、オヤジたちばかりだけど、たまにワンちゃんと一緒に人も。犬O.K.みたい！清掃員の人や、近くの消防署の人もいたり。BGMなんてなく、テレビからニュースが流れていても、オヤジたちはワーワーお喋りしたり、スロットで遊んだり。朝からビールやワインを飲んでいる人も珍しく



ランチもやってます。お昼時はオープンテラスも満席。通りを歩いているとよくオヤジさんが手を振ってくれました。

ありません。それぞれに、この朝の時間を楽しんでいて、旅行者の私にとっても居心地の良いお店でした。

ちなみに他のところを覗いてみると、お客

さんは様々。女性の多いバル、若い人が集まったバル。みんなそれぞれ行きつけがあるんだろうなあって、思いをはせます。



そうそう「スペイン人は猫舌だよ」って聞いたことがありますが、本当かもしれません。カフェ・コン・レーチェを頼むと私

はたいてい「ぬるい!」と思う。もし、熱々のものが飲みたいときは、この簡単なスペイン語を注文に添えるといいですよ。

“¡Leche, muy caliente!”

(レーチェ、ムイ・カリエンテ:直訳すれば「牛乳、とっても熱い」)。



「カフェ・コン・レーチェ」は、エスプレッソに牛乳の入ったカフェ・ラテ。毎朝同じ注文をして笑われていました。

これだけでも十分、相手に伝わります。牛乳は熱くしてね(笑顔)!って。こう言うと、相手は、「ええ?なんだよ」ってような



photography: Ohi Mayumi

滞在先の周辺。どれだけ歩き回っても飽きないこの美しい街並み。

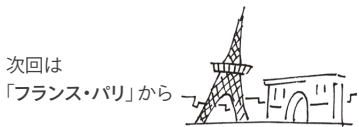
顔を

するものの、ちゃんと温かいカフェ・コン・レーチェを出してくれます。それでもたまに、ぬるいものが出てくるとありますが、朝のひとときをバルで過ごすこと、とってもオススメです。



大井 麻有実(おおいまゆみ)

この土地の魅力に、取りつかれ、スペイン語の勉強も始めました。お陰で、楽しい友人達とめぐり合い、語学勉強は、私のライフワークです。いずれは、カタルーニャ語の勉強も……と密かに思っている今日この頃。



今回は「フランス・パリ」から

水気がなくなるまで30分ほど煮込む。「千切り」ではなく「干切り」。島ではいわゆる切り干しのことを、干切り(かんぎり)という人が多い。

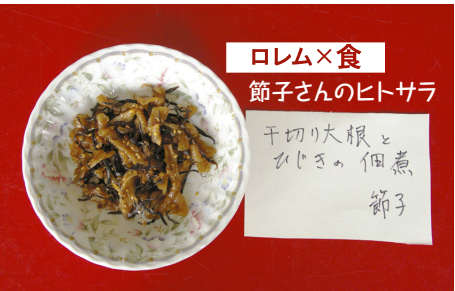


畑には発育のよい大根があちらこちらにある。食べきれない分を加工して保存食にする。海風は干すのにちょうど良いのだが、近ごろ野良猫が食べに来て困っている。

この辺りはひじきがよく採れると教えてくれた。これもそうなのだろうか、海辺で食べる佃煮はいつもに比べ磯の香りがする。



節子さんのヒトサラ、ごちそうさま。☺



photography: Sugimoto Katsuhito

朝10時、笠岡沖に浮かぶ白石島の波止場に、自転車を押した節子さんがやってくる。前カゴに入ったジップロックには、お手製の「干切り大根とひじきの佃煮」がずっしり。作るのは2回目、今日は少し甘味の強い仕上がり。



刻んだ干切り大根にひじき、鰹節、ゴマなどを、みりんや醤油、砂糖、酒で味付けして、

Lorem ipsum

No. 01 | Apr. 30, Sat., 2016  
 編集後記

ロレム・イブサムとは、出版物などの編集作業において、未定原稿の代わりに仮置きするダミーテキストの一種です。冒頭の一文を抜き出すと、“Lorem ipsum dolor sit amet, consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua.”

古代ラテン語の文章や単語を切り貼りして作られたため、そのままでは、何語にも当てあはまらない、意味の通じないアルファベットの羅列です。しかし、リズムをもたせて並べ文章らしき体裁としていることで、文章量の目安や読みやすさの確認、全体のバランス調整など、様々な参考を与えてくれる役割を果たしています。

私たちの日常も、てんでな毎日が、てんでに積み重なり、交わったり交わらなかつたりしていますが、その一部を切り取り、浮かび上がらせ、集合体(=社会)の中に置くことで、何かしらの意味を帯びてくるかもしれません。そんな「暮らし」の一端を、本誌でお届けしていけたらと思います。次号も、お手に取りご覧ください。☺

ロレム・イブサム | 第1号／発行:2016年4月30日  
 編集:杉本 克敬, 小野 敬司／デザイン:スタジオオム\*  
 発行所:ロレム・イブサム事務局  
 〒700-0821 岡山市北区中山下2-1-21  
 中山下21ビル 302 EXCAFE内  
 mail:loremipsum.paper@gmail.com



本誌掲載の文章、画像などを無断で転載することはご遠慮下さい。